

吉田幸一編

天文雜説

付、
ゑんぎ長者物語

古典文庫

吉田幸一編

天文雜説

付、
ゑんぎ長者物語

古典文庫

古典文庫第六二八冊

平成十一年三月二十日印刷発行

非売品

編者 吉田幸一

発行者 吉田幸一

天文雑説

印刷者 共立印刷株式会社

製本者 (有)武蔵製本

発行所

114-0024

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話〇三(三九一〇)二七一七
振替口座〇〇一九〇一九一四五九七番

目次

一	天文雜説	写本十二卷十二冊	……	五
二	ゑんぎ長者物語	版本上中下卷三冊	……	三七
	解説	……		四二七

凡例

一、本書には、他に所見のない説話集『天文雜説』写本。天竺の物語『ゑんぎ長者物語』版本の二作品（架蔵）を収めた。

一、翻刻にあたり、できる限り底本に忠実にと心がけたが、大体次のようにした。

イ、漢字、仮名の表記は、概ね現行の字体に従ったが、異体字などは出来る限り原本通りにした。𪛗・𪛘・哥・尔…など。明らかな誤字は、その右傍に（マ）印を付けた。

ロ、仮名遣い、清濁、踊り字、合字、振仮名なども底本のままとした。

ハ、写本には句読点が施されていないが、解読の便を考えて、読点を施した。

版本は底本の通り「。」をつけた。

二、底本たる『天文雜説』写本には丁付がつけてないから、そのままとし、『ゑんぎ長者物語』版本は版心の丁付によって丁数と、その下に表・裏（オ・ウ）の区別を記し、各丁（裏）で改行した。

ホ、版本には挿絵がある。その順序に従って順番号を付け、本文の所在箇所近くに挿入した。

へ、『天文雜説』は、説話数が多いので、各巻の目録題と、各説話ごとに題名の下に通しの順番号（洋数字）を付けた。

天文雜說

卷第一

天子新統天下第一

嶺南新如象中 竹石亭後物中

溪中有石如象中

幸人不知玉像物中

石如象中如象中

石如象中如象中

石如象中如象中

竹石亭後物中 竹石亭後物中

天文雜說卷一

嵯峨釈迦如来事 付古寺住物事

洋中有不思議事

牢人於北山述懷物語事

尊田親王北条家御諫事

東寺三号之事

鴻臚館之事

竹生嶋失火事 付老武手柄事

(7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)

嵯峨釈迦如来事 付古寺住物事

(1)

洛東にふる寺あり、昔ハはなやかなりときこえしかと、近年ハ零落せり、しかれとも、衰微の事ハ当寺にかきらす、畿内の大乱にいたりて、城辺の寺塔おほく破壊したり、此寺に縁起住物等ハおひたゝしく侍り、一日参詣せしに、住持たち出てかたのことくもてなし、件の縁起とも取出してみせ侍り、其中にいつれを始終ともミえす、古き事ともしるしたる反故あり、それに嵯峨の釈迦如来の記文あり、この御仏ハ、世に毘須羯摩か作せし尊容と申はへれと、さにハあらず、齋然法橋大唐にてうつし奉りてきたれし御仏なりとあり、しからハ本仏ハ大唐にましくゝて、此くにへわたりしハ、模しのほとけなりとみえたり、いま

しはらく本文を拳をはんぬ、左のことし

嵯峨釈迦如來の御事

釈迦如來三十七の御とし、御は、まや夫人の報恩のために、忉利天にのほり給つゝ、一夏九旬のあいた法を説給ふ、いはゆる摩訶摩耶經これなり、其時、天ちくに仏ましまさゝりしかは、衆生うれへかなしミたてまつりて、十方をしらす中にも、于填大王ことに恋たてまつり給ひて、しやくせん檀をもて仏像をきさミ拝ミたてまつらん、とおほしけり、その時、帝釈天の臣、毘須羯摩天巧匠のみちきはめたりしかハ、遙に于填王のこゝろさしをしりて、化して人となり、降て仏体をつくれり、是則如來成道の後、第八年なり、その、ち一千三百五年をすき

て、西晋の代にあたりて、西天の梵古鳩摩羅琰といふ人、かの仏像を負ひたてまつりて遙に震旦におもむきけり、ひるハ法師ほとけを負たてまつり、夜ハ仏法師を負給て、おほくの嶮難をしのきて、きしこくにいりぬ、其国の主 白純王法師をとゝめ、仏像をあかめて留奉る、その時白純王のいもうと、とし二十はかりなるか、くまらゑん法師をミて、通せんとおもふ氣しよくみえければ、王聞て悦て下し合せつ、わつかに一夜の間に、即懷妊す、其子限りなき智者なるへき相、かねてあらはれけり、その子といふハ、羅什三蔵是なり、什公いまた生せざるに、父の鳩まら琰ハうせけり、そのは、出家して、つゐに三果を得たり、什公うまれて七さいにして、日々千偈を誦しけり、九さいにして罽賓にいたり、十二歳にして龜茲国にかへるも、後秦王苻堅とい

ふ人、大將軍呂光と云者に兵十一万を添て亀茲をうち、并に仏像と羅什とをうはひとる、凡仏像亀茲にある事六十余年なり、西京呂光ト申す所に十四年、長安姚興に十七年、後に江南にうつされたまふ、すへて四朝にある事一百七十三年を経玉へり、什公長安に来る比生年七十六なり、この像つゐに漢土の宝物たり、齋然法橋入唐のとき拝したてまつり、即其像をうつし作て、此朝にわたす、嵯峨の釈迦是なり

明德^{癸酉}七月廿一日写点畢

應永七年^{庚辰}八月十八日、以金剛峯寺宝性院法印宥快自筆の点本写之訖

同廿八年^{辛丑}二月十八日、以高野山金剛三昧院之長老弘尊自筆の本写之畢

仏子祐成

寛正三年^{壬午}十二月十日 以春道房之律師

祐成自筆の本写之畢

右筆隆采^{年廿三}

かくのことくのおく書次第なり、いみしき記文なるにや、とみえたり、いま又本文のことく一字をも違へす写して、是にしるし侍る、若不審の事あらハ、後の人これを糺すへし

洋中有不思議事

(2)

ちかき頃、さつまの国よりのほりし人かたり侍るハ、大海へふねを乗出し侍るに、はしめのほとハいと心ほそく覚えしか、次第になれ侍りてハ、海上ほといとかひくしき物は侍らす、陸路十日余にも行かた

きところを、一日一夜はかりにもはしりつき侍れハ、これほといミしき物ハなく侍る、さて洋中にハさま／＼のふしき侍る物也、一とせあらき風にあひて、昼夜七日はかりもはしり侍りしに、ある夜、舟はたかたふきてかへらんとすることくに侍れハ、いとおそろしとおほえて、五六人の舟人一所にあつまりたるに、舟のさきのかたに、ふとさ一團はかりと見えたるか、くろ色なる物横へ乗て、また海へ入侍り、その長さハ五六十間もあるへきと覚えしか、舟のはた板にて身をすりまハしけるとみえて、そのあとにあふらのやうなる物、五斗はかりもふなそこにたまりけり、正体ハいかにも見分かたくはへりし、其後又まへにとをり侍るより、いとちいさけなるもの、これもさきのことくにしてうミに入侍る、つく／＼此事をはかり侍るに、海中にハ大きなる